

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2025.10. VOL.57

contents

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究
Current topics in research

和 お知らせ
Information

韓国・ハルリム大学との 看護師国際交流に関する協定締結式 および国際合同シンポジウムを開催しました

2025年5月28日から31日まで、本学の海外拠点校である韓国・ハルリム大学から、ユン理事長、チョイ総長、キム医療院長、ユ医学研究科長をはじめとする18名の一行が来学し、3日間にわたって交流イベントを実施しました。ハルリム大学とは2006年に大学間交流協定を締結し、これまでに医学研究科を中心に学術セミナーの交流を行い、また看護学部では学生実習の交流などの学術交流や学生交流を積極的に行ってきました。

この度、医学部再編にともない将来を見据えた交流の深化の第一歩として、5月29日には、名古屋市立大学医学部附属病院群（日本）とハルリム大学医療センター（韓国）は、両国間の看護分野における国際交流と協力を推進するため、「看護師国際交流に関する協定覚書（Memorandum of Understanding）」に関する締結式を開催いたしました。

ハルリム大学はじめ同医療センターが持つ、医療を取り巻くDXの先進的な事例やノウハウを取り入れることで、我が国における看護師のタスクシフトや働き方改革等の課題への対応にも寄与できるものと考えています。

同日には協定締結に引き続き「将来の医療と看護のパラダイム変化～AI、ロボット、高齢化医療～」をテーマに、第5回目となる名古屋市立大学・ハルリム大学国際合同シンポジウム2025を開催し、13名の研究者による最先端の研究成果の発表と活発な意見交換を行いました。参加者は300名を超え、盛会のうちに終了しました。

AIやロボットを駆使した医療DXの取り組みや本学での事例など、国内外での先進的な事例を基に、両国の大きな課題である超高齢社会における医療について活発な議論が行われました。両国が抱える医療課題には多くの共通点があり、それを再認識する機会ともなりました。今後も両大学間での研究・教育活動の充実、そして医療水準のさらなる向上を目指し、より一層交流を深めてまいります。

文責：医学部事務室



「看護師国際交流に関する協定」締結式にて



国宝犬山城にて



シンポジウムの様子



ハルリム大学・本学参加者ら集合写真

“瑞医の由来”

『瑞医（ずいい）』という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port（港・空港）」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

看護学研究科長・医学部保健医療学科長(看護学専攻長)のあいさつ

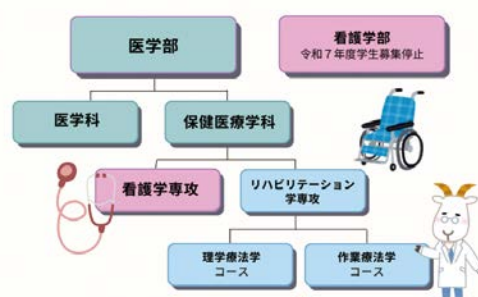
2025年4月から看護学研究科長および医学部保健医療学科長(看護学専攻長)を務めています。

2025年4月現在、名古屋市には6つの病院からなる附属病院群があり、その病床数は2,223床にもなります。その中で、高度急性期から慢性期までの幅広い医療を連続して提供する「なごや医療モデル」を支え、地域の医療に貢献できる医療人の育成に貢献したいと考えています。名古屋市立中央看護専門学校が、2023年4月に本学と統合した後、本学新生の定員が80人から120人に増えました。また、この4月から、保健医療学科にリハビリテーション学専攻の学生が新たに入学しています。医学・看護・リハが連携しながら学修し、若く活力ある学生が増えることで、本学が益々発展していくことを期待しています。

大学院教育では、一度臨床に出て社会人となってから、専門看護師資格の取得や学位取得を目指して研究する学生も多くいます。2024年4月に医学研究科に設置されたNP(診療看護師)コースの教育に関しては、看護学研究科の教員も数多く関与しています。また、学部を卒業してすぐに進学し、助産師を目指すコースもあります。

グローバル化に向けた対応の一環として、海外の看護系大学との国際交流にも力を入れています。医学研究科、附属病院群、各病院の看護部と密に連携しながら、学生たちにとってより良い教育ができるよう努めたいと思います。

文責：看護学研究科長・医学部保健医療学科長
(看護学専攻長) 窪田 泰江



医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻長のあいさつ

2025年4月より医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻の専攻長を拝命しました岩瀬 環です。名古屋市立大学開学75年の年、リハビリテーション学専攻は船出をしました。一期生80名が本学に新風を吹き込んでいます。大学全入時代を迎え、教員・職員らはオープンキャンパスや進学イベント等で、認知度を上げ優れた学生を獲得すべく、日々努力を重ねています。

医学部の傘下にある利点は多々あります。研究力につながる基礎医学を積極的に講義して下さる医学科の教授もおみえになります。臨床実習には我が国最大級の病床数を誇る附属病院群の恵まれた環境があり、教員は附属病院群の現役のセラピストや医師でもあります。医学系研究科という同じ屋根の下に、医学、看護学と共に大学院を設置する準備も始まっています。

学舎となる名東キャンパスは、名古屋市厚生院から引き継ぐ土地です。厚生院は1926年に創始、1963年に特養第1号認可、1995年にSupercentenarianの世界初剖検など、先駆的な医療福祉施設でした。その後を受け、2023年にみらい光生病院が始動し、2026年にリハビリテーション学専攻が加わります。

優れた医療人を育て、ご支援いただく名古屋市に貢献し、市民の皆様に奉仕する所存です。ご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

文責：医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻 専攻長
岩瀬 環



小児慢性痛専門外来を開設しました／ 名市大病院

慢性痛で苦しんでいるのは成人だけではありません。小児の慢性痛は、不登校や睡眠障害、成人慢性痛への移行、家族機能の悪化に関係すると言われており、さらに経済損失も大きいと報告されています。小児慢性痛の治療は、多職種による集学的治療が基本ですが、日本では小児慢性痛を専門的に扱っている施設がほとんどありません。名古屋市立大学病院いたみセンターでは、2017年から多職種による成人慢性痛治療を行なっていますが、その経験を活かして、2025年4月より、新たに多職種による小児慢性痛外来を開設しました。痛み専門医の他、臨床心理士、看護師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、そして小児特有の発達特性にも対応するために、こころの発達診療研究センターの精神科医に協力をいただいております。痛みを抱えるこどもを全人的に評価し、ときに保護者の協力を得ながら、多職種で介入しています。時間をかけて診療するため、初診枠は毎週水曜日午前2枠のみですが、より効率的な診療体制を模索中です。こどもたちが健全な毎日を送ることができるよう、みなさんでお手伝いしたいと思っています。



いたみセンタースタッフ



小児科外来に掲示してある
ポスター

文責：いたみセンター

命を救う瞬間—BLS研修がもたらした実践の力／ 西部医療センター

2025年4月、当院リハビリテーション科の理学療法士 山田翔太さんが帰宅途中、歩道の縁石部分に衝突している車に遭遇し、車中には意識を失っている男性がいました。

当院から自動体外式除細動器（AED）を運んで周りにいた方と救命措置を行った結果、男性を救うことができ、名古屋市北消防署より適切な処置を施したとして感謝状が贈呈されました。当日は傷病者の方も来られ、お元気な姿で再会することができました。これは医療人にとって、誇らしく、またやりがいを感じる瞬間だと思います。

この対応は、当院が笹野信子医師の指導の下、全職員を対象に定期的に実施しているBLS（一次救命処置）研修の成果のひとつです。緊迫した場面においても、冷静に必要な手順を選び、的確に処置を施す力は、まさに日々の積み重ねから生まれるものです。

当院では今後も、すべての職員が救命処置を自らの手で行えるよう、研修体制の充実を図ってまいります。

文責：西部医療センター 経営課



北消防署長と感謝状を贈呈された方達



大原病院長に報告

新任教授紹介

臨床病態病理学分野 いなぐま しんご 稲熊 真悟 教授

2025年6月1日付で、名古屋市立大学大学院医学研究科臨床病態病理学分野教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は、2000年に本学医学部を卒業後、実験病態病理学講座（故・白井智之教授）にて学位を取得し、愛知医科大学病理学講座、東部医療センター病理診断科を経て、今回母校に着任いたしました。

これまで、消化器腫瘍や中皮腫を対象に、腫瘍進展や免疫逃避の分子機構の解明、診断・治療マーカーや創薬標的の探索に取り組んでまいりました。

診療では、ゲノム医療に対応した検体取扱体制の整備や免疫染色技術の導入、遠隔診断体制の構築を進め、病院機能評価では東部医療センター病理部門として高い評価をいただきました。

今後は、名古屋市立大学病理診断部を中心に関連施設との連携を深め、遺伝子診断技術の導入と若手病理医の育成にも尽力し、地域医療と先端医療に貢献してまいります。

引き続きのご指導とご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。



稲熊 真悟 教授

新任教授紹介

精神・認知・行動医学分野（東部医療センター） おおやま かくしょう 大山 覚照 教授

2025年4月、名古屋市立大学医学部精神・認知・行動医学分野教授を拝命致しました、大山覚照と申します。東部医療センター精神科診療科部長を担当しております。当科は一般の精神科外来を持たず、身体疾患で入院中の患者さんに特化したコンサルテーション・リエゾン（CLS）医療を展開しております。身体治療を妨げる要因となるせん妄・不安・抑うつ・不眠に、薬物療法と非薬物的介入を組み合わせ早期回復をめざします。救命センターでの自殺企図例、緩和ケア、認知症まで、多職種での協働のもと、切れ目なく支援し、せん妄・睡眠障害などの研究、次世代CLS精神科医の育成に力を注ぎます。大学病院として教育・研究・地域連携を三本柱に、若手が伸びやかに成長できる場づくりに努めます。「からだところをつなぐ精神医学」を役立つ形で、市民・関連病院・学生の皆様へ広く届けてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



大山 覚照 教授

新任教授紹介

看護学研究科感染予防看護学分野 おかやま かな 岡山 加奈 教授

2025年4月1日付で、名古屋市立大学大学院看護学研究科感染予防看護学分野教授を拝命いたしました岡山加奈と申します。謹んでご挨拶申し上げます。

私は、看護師として従事した際に医療関連感染症対策に関心を持ち、2003年に広島大学大学院保健学研究科へ、2005年に大阪大学大学院医学系研究科へ進学し、手指衛生や細菌の増殖因子に関する研究を行ってまいりました。学位取得後は、医療関連感染症対策や腸内環境に関する研究および看護教育に携わってまいりました。また、大学と中学校の協働で、看護学生と中学生の交流を通した「手洗いとマスクのつけ方教室」を実施しておりました。

名古屋市立大学は、感染予防看護学分野がある数少ない貴重な大学です。微力ではございますが、歴史を築いてこられた先生方と共に、地域の皆様と大学に貢献できればと考えております。今後ともご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。



岡山 加奈 教授

精神障害学分野

^{さとう}^{だいすけ}
佐藤 大介 教授

2025年4月1日付で作業療法学コース教授を拝命致しました佐藤大介と申します。千葉大学でメンタルプロフェッショナルの育成、研究に従事し、本専攻設置準備に携わりました。附属病院群と連携し、地域医療へ貢献する教育、研究に尽力して参ります。ご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

^{なかがわ}^{よしろう}
中川 与四郎 講師

作業療法学コース精神障害学分野の講師を拝命しました中川与四郎です。これまでの臨床経験と研究で得られた学びを活かし、次世代を担うこととなる学生の成長を支えていきたいと考えております。至らぬ点多々あるかと存じますが、ご指導いただけますと幸いです。

^{くるまだに}^{ひろし}
車谷 洋 教授

2025年4月1日付で作業療法学コース教授を拝命いたしました車谷洋と申します。国立障害者リハビリテーションセンターで青年期発達障害を、広島大学で手の障害を対象に治療と研究に従事してまいりました。“手”を切り口に、新たな支援と治療の構築に取り組む所存です。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

^{しおづ}^{ひろやす}
塩津 裕康 講師

2025年4月1日付で医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻の講師を拝命いたしました塩津裕康と申します。謹んでご挨拶申し上げます。発達障害児への作業療法研究を通じ、子ども・保護者に貢献できるよう研究・教育に尽力いたします。ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

^{おおぼし}^{ゆみ}
大星 有美 教授

2025年4月1日付で作業療法学コース認知神経科学分野の教授を拝命いたしました大星有美です。作業療法では、認知機能・情動・社会的認知への介入がますます重要となっています。これらを中心とし科学性に基づいた作業療法を提供できる人材の育成に尽力いたします。何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

^{くさかわ}^{ゆうや}
草川 裕也 准教授

この度、准教授を拝命いたしました草川裕也と申します。これまで手外科疾患や脳血管障害の作業療法、セラピスト養成教育、神経に関する基礎研究に従事してまいりました。附属病院群と連携し、優れた医療人の育成に尽力いたします。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

^{ふじた}
藤田 ひとみ 教授

生体構造学分野の教授を拝命しております藤田ひとみと申します。名古屋市立大学公衆衛生学分野で学位と上級疫学専門家を取得致しました。専門は発達期理学療法学です。リハビリテーション学専攻学生の臨床・研究力を育成して参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

^{たけなか}^{なな}
竹中 菜々 講師

生体構造学分野 講師に着任いたしました竹中菜々です。これまでは、京都大学 iPS細胞研究所及びハーバード大学医学部において、難治性筋疾患の治療法開発に携わってまいりました。本学では生理学の講義・実習を主に担当いたします。教育と研究の両面から次世代の医療人育成に貢献してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



佐藤 大介 教授



中川 与四郎 講師



車谷 洋 教授



塩津 裕康 講師



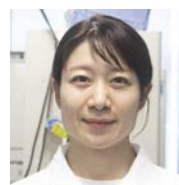
大星 有美 教授



草川 裕也 准教授



藤田 ひとみ 教授



竹中 菜々 講師

発達障害学分野

認知神経科学分野

生体構造学分野

02 時の人 People in the news

医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻教員紹介

運動科学分野

池田 崇 教授

4月より理学療法学コース 運動科学分野に着任いたしました池田崇です。当分野では運動器やスポーツに関する理学療法の教育・研究に加えて、栄養も含めた応用生理学の視点で、附属病院群の先生方とコラボレーションをしていきたいと考えております。先生方のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

黒川 由貴 助教

この度、本学リハビリテーション学専攻理学療法学コースの助教を拝命いたしましたことを大変嬉しく思っております。臨床力と研究力を兼ね備えた学生の育成に力を尽くすとともに、本学の更なる発展に貢献できるよう誠心誠意努めてまいります。

野 嶋 一 平 教授

リハビリテーション学専攻の野嶋一平と申します。2023年より新学科設置に携わり、本年4月に第1期生を迎えることができ、大変嬉しく思っております。今後は、学科の充実や大学院の設置など、本専攻のさらなる発展に尽力してまいりたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

堀 場 充 哉 講師

2025年4月1日付で理学療法学コース講師を拝命いたしました堀場充哉です。名古屋市立大学病院でパーキンソン病・脳卒中リハビリ研究に携わってまいりました。今後は成果を教育・臨床に活かし、人材育成に尽力いたします。ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

山 中 英 士 助教

名古屋市立大学の一員として研究・教育に携われることを大変嬉しく思います。私は、運動制御（障害）のメカニズム解明を通じて、より効果的なリハビリテーションにつなげることを目指して研究に取り組んでいます。これから、臨床と研究・教育の橋渡しができるよう努めてまいります。

加 藤 倫 卓 教授

心臓リハビリテーション科学領域の教授を拝命いたしました加藤倫卓と申します。私は、循環器疾患患者に対する心臓リハビリテーションの臨床研究と教育を専門としております。高齢化に伴い多様化する医療・介護ニーズへの対応を見据え、「なごや医療モデル」に基づき、附属病院群を中心とした心臓リハビリテーションの連携体制の構築を進めております。

足 立 拓 史 講師

2025年4月1日付でリハビリテーション学専攻理学療法学コースに着任しました足立拓史と申します。循環器病を中心に疾病・障害の重症化予防に関する研究に従事してきました。今後は、附属病院群と連携し、本学ならではの特色ある取り組みに繋げてまいりたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



池田 崇 教授



黒川 由貴 助教



野嶋 一平 教授



堀場 充哉 講師



山中 英士 助教



加藤 倫卓 教授



足立 拓史 講師

ニューロリハビリテーション科学分野

心臓リハビリテーション科学分野

スマートフォンで学ぶ5つの認知行動スキルがうつ状態を改善 —世界最大の臨床試験で解明 (Nature Medicineに掲載)

名古屋市立大学医学研究科・精神・認知・行動医学分野の明智龍男とこころの発達医学寄附講座の坂田昌嗣らが、京都大学、ハーバード大学らの国際共同研究グループで実施した研究が、医学系のトップジャーナルNature Medicine (IF=52) に掲載されました。

本研究では、人口の10%以上が経験し、労働生産性の低下などの原因となる閾値下うつ状態を有する成人を対象に、スマートフォンを用いて認知行動療法 (CBT) を自学自習で提供可能なアプリ「レジトレ!」を開発し、5種類のCBTスキルの効果を検証する世界最大のランダム化比較試験 (RCT) を実施しました。

本研究は、すべての手続きと介入がオンライン上で完結する「分散型臨床試験 (Decentralized Clinical Trial: DCT)」という次世代型の臨床試験スタイルを採用。日本全国から3,936名もの参加者を募集し、実生活環境下でCBTアプリ「レジトレ!」のうつ状態に対する効果を検証しました。

このアプリには、CBTの5つの重要なスキル (行動活性化、認知再構成、問題解決、アサーション、睡眠行動療法) を搭載し、4つの2×2要因試験を同時に運用するマスタープロトコル方式により、個々のスキルおよびその組み合わせを6週間提供。結果、すべてのスキルがうつ状態を改善し、特に行動活性化+認知再構成、行動活性化+問題解決、行動活性化+アサーション、睡眠行動療法の高い効果が確認されました。またこれら効果は、6週間後のみならず26週間後においても持続していました。

本成果は、2025年4月に国際学術誌「Nature Medicine」に掲載され、日経新聞、Yahoo!ニュースなど国内外のメディアでも取り上げられました。

【論文タイトル】

Cognitive behavioral therapy skills via a smartphone app for subthreshold depression among adults in the community: the RESilIENT randomized controlled trial

【著者】

古川壽亮*, 田近亜蘭, 豊本莉恵, 坂田昌嗣, 羅妍, 堀越勝, 明智龍男, 川上憲人, 中山健夫, 近藤尚己, 福岡真悟, Ronald C. Kessler, Helen Christensen, Alexis Whitton, Inbal Nahum-Shani, Wolfgang Lutz, Pim Cuijpers, James M. S. Wason, 野間久史

【掲載学術誌】

学術誌名: Nature Medicine

DOI番号: <https://doi.org/10.1038/s41591-025-03639-1>

文責: 精神・認知・行動医学分野 教授 明智 龍男、こころの発達医学寄附講座 講師 坂田 昌嗣

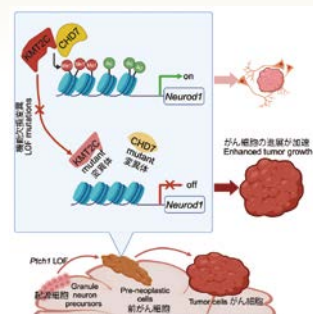


アプリ「レジトレ!」の画面

小児悪性脳腫瘍の進行に関与する 遺伝子スイッチ の鍵となる分子を発見

エピゲノムは遺伝子の発現をオン・オフするスイッチ機構で、正常な細胞の働きを制御しますが、がんではその調節が破綻します。代表的な小児脳腫瘍の一つである髄芽腫でもエピゲノム制御遺伝子の変異が報告されてきましたが、その進展への関与は不明でした。私たちはCRISPR-Cas9を用いてマウスでヒト腫瘍由来の変異を再現し、CHD7やKMT2Cの欠損がヒストン修飾を変え、細胞増殖抑制に重要なNEUROD1の発現を抑えることで腫瘍進展を促す仕組みを解明しました。これによりエピゲノムの視点から新たな治療標的を提案しました (Cell Reports, PMID:40393452)。

文責: 脳神経科学研究所 腫瘍・神経生物学 教授 川内 大輔



03 研究

Current topics in research

ありふれたウイルスががんを引き起こす機構を解明!

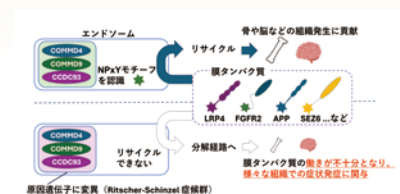
EBウイルス（EBV）は世界中のほとんどの人に生涯潜伏感染しているありふれたウイルスですが、ごく一部の感染者には様々ながんを引き起こします。名古屋市を中心とした国際共同研究グループは、世界中の人から取得した990株のEBVの遺伝情報（ゲノム）を解析し、このウイルスが変異を獲得して特定の人にだけがんを発症させる仕組みや、1種類のウイルスが20種類以上のがんに関わる仕組みなどを解明しました。これらの成果は、EBVが引き起こすがんの予防や治療法開発に役立つと期待されます。この研究は権威ある血液学の論文誌『Blood』に掲載されました（PMID:40569273）。

文責：ウイルス学分野 教授 奥野 友介



リサイクル異常症という新たな疾患発症メカニズム —様々な合併症を伴う原因不明の小児難病の病態を解明—

私たちの研究グループは、ゲノム解析を通じて、CCDC93、COMMD4、COMMD9という3つの遺伝子が小児希少難病であるRitscher-Schinzel症候群の新たな原因であることを明らかにしました。これらの遺伝子は、細胞内のエンドソームにおいて膜タンパク質を細胞膜へ再輸送する「リサイクル機構」に関与しており、その機能が損なわれることで重要な膜タンパク質が分解され、神経系や骨格系、腎臓など多くの臓器で機能障害が引き起こされることがわかりました。この発見により、新たな患者の診断が進んだだけでなく、診療時に注意すべき臨床的特徴も整理されました。さらに、「エンドソームのリサイクル異常症」という新しい病態概念の提唱につながり、今後の診断法や治療法の開発に繋がることが期待されます。（Science Translational Medicine, PMID: 40601774）



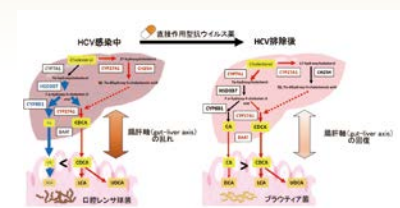
文責：新生児・小児医学分野 特任助教 加藤 耕治

C型肝炎ウイルスの排除が腸内環境の劇的な回復をもたらす —ブラウティア菌の増加が肝機能回復のカギに—

C型肝炎の治療によりウイルスが排除されると、肝臓だけでなく腸内環境も改善されることが本研究で明らかになりました。治療後には有用菌「ブラウティア菌」が増え、肝機能の回復への寄与が確認されました。また、病期が早期のうちにウイルスが排除された患者ほど、腸内環境の回復が顕著でした。腸内フローラや胆汁酸代謝酵素の遺伝子発現、便中胆汁酸プロファイルの変化を統合して解析した本研究は、腸と肝臓の密接なつながりを示し、C型肝炎の早期治療の重要性を支持する内容です。この研究成果を医療関係者だけでなく、広く市民の皆様にも知っていただき、早期治療の重要性を伝えていきたいと考えています。

研究成果は専門学術誌JHEP Reportsに掲載されました（DOI番号：10.1016/j.jhepr.2025.101494）。

文責：中央臨床検査部 准教授 井上 貴子



孤立から包摂へ：日本のLGB+生徒の自殺念慮と学校支援の関連

性的少数者若者の自殺リスクの高さは公衆衛生上の重要な課題です。私たちは日本人若者性的少数者を対象に自殺リスクに関する調査を実施し、15-25歳の2025名のレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル若者データを分析しました。過去1年の自殺念慮は32.3%、自殺未遂は8.8%でした。セクシャリティに関するハラスメント、いじめ、ネガティブな発言への接触は、自殺未遂のリスク要因となっており、反対に学校にLGBTいじめ防止禁止ポリシーがあること、LGBT支援があることは、自殺念慮の低さに関連があることを示しました。本成果を周知し、よりLGBT若者が過ごしやすい環境づくりにつながるよう働きかけていきます。（SSM - Population Health誌 PMID: 40735461）

文責：国際保健看護学 教授 金子 典代、国際保健看護学 特任助教 アダムヒル

セクシャリティ関連のハラスメントを受けたり、いじめられた経験、セクシャリティ関連のネガティブ発言への接触があることはLGB+若者の自殺未遂リスクを上げる

要因	調整オッズ比 (95%CI)
セクシャリティ関連ハラスメントを受けた経験有	1.73 (1.12-2.69)
セクシャリティ関連でいじめられた経験有	2.11 (1.14-3.90)
セクシャリティ関連のネガティブ発言への接触有	1.84 (1.17-2.90)

学校にLGBTいじめ防止ポリシーやLGBT支援団体があることはLGB+若者の自殺念慮リスクを下げる

要因	調整オッズ比 (95%CI)
学校にLGBTいじめ防止ポリシーがある	0.66 (0.45-0.97)
学校にLGBT支援窓口・団体がある	0.66 (0.45-0.97)



なごや宇宙医学・歯学研究所キックオフシンポジウムを開催しました

日本の航空宇宙産業の中核地域でもある名古屋圏として本学に設立された「なごや宇宙医学・歯学研究所」は、極限環境における人体の変化を探究し、地上医療の課題解決にも寄与する先端研究拠点です。

2025年6月26日に、桜山キャンパス本部棟4階大ホールにて、「なごや宇宙医学・歯学研究所 キックオフシンポジウム」を開催しました。当日は、131名の方にご参加いただき、活発な議論が交わされました。

郡健二郎理事長から、宇宙飛行士の腎結石リスク低減に向けた研究や、宇宙における生殖医療など、これまでに展開してきた国際共同研究を紹介されました。歯科医師で医学研究科大学院生の藤田櫻子氏は、NASAでの研修経験、iPS細胞による歯の再生や無重力下での歯科医療の可能性と未来を語り、分野横断的な研究の意義を示しました。宇宙をテーマにした学内外の研究者が協力して、近未来に迫る、宇宙開発での医療に貢献してまいります。



シンポジウムの様子

文責：なごや宇宙医学・歯学研究所所長 安井 孝周

第124回日本皮膚科学会総会 優秀演題賞受賞のご報告

このたび、第124回日本皮膚科学会総会研修医・学生セッションにて「下口唇全摘による口唇欠損に対して鼻唇溝部顔面動脈皮弁で再建を行った有棘細胞癌の1例」により優秀演題賞を賜りました。本報告は症例報告ではありますが、口唇癌とその治療法、再建法をまとめたものであり、学会当日は活発な質疑応答を通じて多角的なご意見、ご助言を頂き、治療法の選択肢と、現状の課題を再認識する貴重な機会となりました。今回の受賞は、直接ご指導頂いた加藤先生、発表を後押しして頂き、当日暖かい応援を頂いた森田先生をはじめとした皮膚科の先生方のご支援の賜物です。心より感謝申し上げます。今回、9,000人近くが参加するような大きな学会での学会報告という貴重な経験ができたことを心から嬉しく思い、今後の研修に一層励んで参ります。最後に、本学の充実した教育環境と多くの先生方の暖かい指導に感謝申し上げます。

文責：医学部6年 伊藤 優希



表彰



集合写真

2025年度初期・専門研修プログラム説明会を開催しました／名市大病院

2025年5月26日に初期研修プログラム説明会、6月23日に初期・専門研修プログラム説明会をwebにて開催し、多くの名市大生・他大学学生の皆さんにご参加いただきました。

5月26日は総合研修センター教員・研修医が中心となり当院の4つのプログラムの特徴を説明しました。救急災害医療センター開棟に向けて、当院の救急医療の機能拡充をアピールしました。

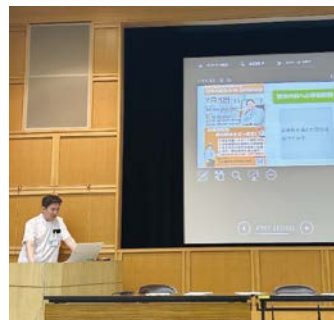
6月23日は各診療科の先生方・シニアレジデントの先生方から、それぞれの診療科での研修について説明しました。当院での専門研修や研究の魅力を存分にお伝えすることができたと感じております。

今後も名市大病院群の将来を担う若者の獲得に尽力してまいります。引き続きご協力いただけますようお願い申し上げます。

文責：総合研修センター



5/26：兼松副センター長によるプログラムの説明



6/23：参加者へメッセージ語る村上センター長

7月18日に院内ICLS講習会を開催しました／名市大病院

2019年から毎年7月に研修医対象に行ってきたICLS（心停止に対する発症10分間で行うべき蘇生法）講習会は、需要の高まりから年2回(7月と12月)の開催となって3年目になりました。

致死的な急変はいつでもどこでも起こり得ます。このような状況に遭遇した場合に落ち着いて対処できるための講習会ですが、28名の受講生(研修医・看護師)は、院内外の12名のインストラクター（医師・看護師・救急救命士）の熱くバイタリティーあふれる指導のもとで、楽しく学んでおり、実り多い講習会になったと感じます。

ICLSコースは「蘇生法」のみならず「チームダイナミクス」「クローズドコミュニケーション」など「多職種協力」「チームとして機能する」こと多くの学びがあります。

そしてこの学びは「教える側の立場で参加する」とより深くなります。

次回は12月19日開催です。

受講希望の方はもちろん、インストラクターを希望される方の参加も歓迎します。気軽にご相談ください。

文責：コースディレクター 救急科 服部 友紀



ICLS講習会の様子

病院機能評価の認定およびWorld's Best Hospitals2025に選出／東部医療センター

病院機能評価は、日本医療機能評価機構が実施する第三者評価であり、一定水準を満たしていると認定されます。当院では2004年9月27日に初回の認定がされ、2025年2月7日に5回目となる更新認定がされました。

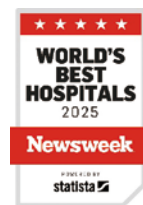
また、アメリカを代表する週刊誌「Newsweek」が、毎年発表している「World's Best Hospitals2025」日本版において、156位（市内4位）に選出されました。

今後も引き続き、地域医療機関との連携を密にし、より質の高い高度・専門医療を市民の皆さまに提供できるよう、機能強化を図ってまいります。

文責：東部医療センター 経営課



機能評価の認定証



「World's Best Hospitals 2025」のロゴ

愛知県救急救命士再教育講習に講師として助産師21名が参加／西部医療センター

愛知県救急救命士再教育講習「分娩対応スキルアップ」は、病院到着前に分娩が発生した際の母子のリスクに備え、救急隊による初期対応の向上を目的として行われました。

当院では年間数件の病院前分娩があり、救急隊との連携強化を図る良い機会となると考え、今回の講師参加に至りました。講習は延べ40回にわたり、1,206名の救急救命士が参加しました。実技を重視した演習が、現場に直結する学びの機会になったと好評をいただきました。

教育的な立場での参加でしたが、救急救命士の皆さんの真摯な姿勢や熱意に触れ、私たち自身が多くの気づきや学びを得る貴重な機会となりました。すべての母子が安心して出産を迎えられるよう、今後もさまざまな形で貢献してまいります。

文責：西部医療センター 3階東病棟 主査 絹田 結香



分娩介助の演習を実施

04 お知らせ Information

内視鏡室をリニューアルしました／みどり市民病院

病院内再整備計画の一環として、2025年3月に内視鏡室を改修しました。今回の改修では、新たに前処置室、内視鏡検査室、鎮静内視鏡検査後のリカバリー室を整備しました。

前処置室の設置により、検査の流れがよりスムーズになり、多くの方に検査を受けていただけるようになりました。内視鏡検査室も広くなり、内装も温かみのある雰囲気に一新され、安心してリラックスしながら検査や治療を受けていただける環境となっています。また、これまでは鎮静内視鏡検査後に別の階にある内科外来まで移動していただいていたが、新しく整備された内視鏡室内のリカバリー室で、そのまま経過観察ができるようになり、患者さんのご負担を軽減できるようになりました。

当院では健診も実施しており、地域の医療機関と連携しながら、この新しい内視鏡室を活用して、地域の皆さまのお役に立てる診断と治療に取り組んでまいります。

文責：みどり市民病院 消化器内科 教授 内藤 格



リニューアルされた内視鏡室

ユマニチュード®の取組みを開始しました／みらい光生病院

みらい光生病院では、フランス発祥のケア技法「ユマニチュード®」の導入に向け、愛知県内で初めてこの研修を受講する医療機関として取組みを開始しました。

ユマニチュードは、認知症や高齢者の方に対し、人間としての尊厳を尊重し、その人らしさを大切にするとする哲学と技術で構成されたケア技法です。

7月には、院内全体でガイダンスや施設導入講演会を受講したのち、看護部の職員を対象に、インストラクターによる講義や演習、ベッドサイドでの実習が行われました。

取組みの効果として、ケアを受ける方にとっては安心感が得られ、不穏やケアの拒否の軽減が期待されます。また、ケアを担う職員にとっても、信頼関係の構築やケアの質の向上につながります。

今後も当院では、患者さん一人ひとりに寄り添うケアを大切にしながら、地域に信頼される病院を目指してまいります。

文責：みらい光生病院 経営課



施設導入講演会の様子



インストラクターによる講義・演習の様子

リハビリテーション病院ラッピングバス、地域を巡る!／リハビリテーション病院

リハビリテーション病院のラッピングバスが、2025年7月7日より運行を開始しました。病院カラーのオレンジを基調とした温かみのある車体デザインで、名古屋市営バス野並営業所担当系統を毎日ローテーションで運行します。

このバスが地域を巡ることで、これまで当院のことをご存じなかった方々にも、身近な存在として感じていただけることを期待しています。当院では、多職種が連携し先進的なリハビリテーション医療を提供しています。上肢ロボット機器やVRを用いた機器などを使用し、患者様1人ひとりの状態に応じた治療を行っています。

このラッピングバスをきっかけに、より多くの方々に当院の存在を知っていただき、地域住民の皆さまのお力になれる、信頼される病院を目指して精進してまいります。街中でお見かけの際は、ぜひ当院のリハビリテーション医療について思いを馳せていただけますと幸いです。

文責：リハビリテーション病院 経営課



ラッピングバス外観

医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻 夏のオープンキャンパス開催結果

2025年8月3日、医学部保健医療学科リハビリテーション学専攻の夏のオープンキャンパスを開催し、総勢268名の皆さまにご参加いただき盛況のうちに終了しました。

当日は、保健医療学科長およびリハビリテーション学専攻長の挨拶に始まり、専攻の概要や入試制度の説明を行いました。また、リハビリテーション学への理解と関心を深めていただけるよう工夫した「リハビリテーション体験」や、この春に一期生を迎えたことで実現した「在学生との交流」も実施し、参加された学生や保護者の皆さまに本学医学部の魅力とリハビリテーション学の可能性を強く感じていただく機会となりました。

今後もオープンキャンパス等を通じて本学医学部の魅力を積極的に発信し、優秀な学生を迎えるとともに、教育研究の発展を通じて名古屋市の地域医療を支えてまいります。

文責：医学部事務局



リハビリテーション体験の様子

THEインパクトランキング2025の SDG3 (健康と福祉) で世界同率45位、国内3位!

2025年6月、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が発表したTHEインパクトランキング2025において、本学は総合ランキングで世界401-600位（国内同率14位、7年連続公立大学1位）にランクインしました。また、SDG別のランキングでは、SDG3「すべての人に健康と福祉を」において、健康と福祉に関する論文数、引用数などの研究実績が高く評価され、世界同率45位（国内3位、国公立大学1位）となりました。

2019年から始まったこのランキングは、国連が掲げる「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals (SDGs)」に対して、大学がいかに取り組み、社会に影響を与えているかを可視化したランキングです。第7回目となる今回は過去最多となる2,526校が参加しました。

今後も本学では、世界をリードする大学を目指し、国際社会共通の課題に積極的に取り組んでまいります。

文責：企画課



ランキング結果のロゴ(SDG3)

2025年は開学75周年!さらなる飛躍をめざした 記念事業を行います

今年2025年に開学75周年を迎えた本学では、右記の記念事業コンセプトを掲げ、交流会との共催による記念事業を行います。

主な事業として、来年2月15日に予定している「開学75周年記念式典」の他、学生の研究支援のための新たな基金の創設や各同窓会と連携したイベントの開催、本学を広くPRするための新聞広告等による広報展開などを実施予定です。今後の続報にご期待ください。

本事業は、本学に関わる皆さまのご理解とご協力により実現されるものばかりです。今後ともお力添え賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

文責：企画課

○記念事業コンセプト

名市大 100年への飛躍

—誇りを胸に 明るい未来の創造へ—

超少子高齢化や大学間競争の激化等が予測される2050年(開学100周年)に向けて、本学は社会や時代の変化に受け身ではなく、私たちの研究、教育、医療の力を結集して、一丸となって明るい未来を創造し、さらなる飛躍をめざすイメージ。

大学ウェブサイト
(開学75周年記念事業ページ)



広報誌：瑞 医 (ずいい)

発行：〒467-8602

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL (052) 858-7116 FAX (052) 851-4801

URL <https://www.nagoya-cu.ac.jp/>

■
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けしてくださるサポーター大募集!
「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。
我こそは、という方は、E-Mail: hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
病院管理部経営課経営係 広報担当まで

※次号の発行は2025年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]